

〔個人研究〕

密教における中観思想-Sahajavajra の例を中心として-

松本恒爾

はじめに

筆者は松本 [2015] において、11世紀頃に活動したと考えられるインド密教論師 Sahajavajra が、Śāntaraksita や Kambala などといったいわゆる瑜伽行中観派の論師を批判し、Candrakīrti を最も勝れた中観派の論師としていることを指摘した。しかし紙数の制限などから、それはあくまで指摘のみにとどまっており、その内容の考察にまで及ばなかった。そこで本稿においては、松本 [2015] での不備を補い、同時に Sahajavajra の中観思想を明らかにしていきたい

1. Sahajavajra おける中観派論師の位置づけ

松本 [2015] と重複する部分もあるが、まず Sahajavajra おける中観派論師の位置づけを確認しておきたい。これが明らかになるのは、その師である Advayavajra¹ の *Tatvadaśa* (以下 *TD*) に対する注釈である *Tatvadaśakaṭikā* (以下 *TDI*)、しかもその *TD* 第二偈に対する注釈においてである。ここで *TD* 第二偈を提示するならば、次のようなものである。

- ・ *TD* 第二偈 : Cf. 密教聖典研究会 [1991] p.245(92).
「真如を知ろうとする者にとって有形象と無形象はない。グルの教誡で飾られることない中 [道] は中 [程度のもの] である。」

na sākārānirākāre tathatām jñātum icchataḥ /
madhyamā madhyamā caiva guruvāganalaṃkṛtā //

この *TD* 第二偈の注釈において、「有形象」という語は有形象中観 (*Sākāramadhyamaka, rNam pa dang bcas pa'i dbu ma) を意図していると注釈され、その具体例として*Śāntaraksita (Zhi ba 'tsho) の *Madhyamakālamkāra* が引用されている。また、「無形象」という語は無形象中観 (*Nirākāramadhyamaka, rNam pa med pa'i dbu ma) を意図していると注釈され、その具体例として*Kambala (La ba'i na bza'

¹ Harunaga& Sferra[2014]においては、直弟子とされる Rāmapāla の記述などから、Advayavajra より Maitreyanātha という呼称が支持されている。(Cf. Harunaga& Sferra[2014] p.59 fn.1) それ故、本来は呼称として Maitreyanātha を用いるべきであるが、本稿では一般によく知られていると考えられる Advayavajra をあえて用いている。

can) の *Ālokamāla* が引用される。そして、これら二つの中観は真如を知ろうとする者にとって重視されるべきものではないと批判され、*Candrakīrti* が *Nāgārjuna* → *Āryadeva* という系譜に連なる、最も勝れた中観派の論師とされているのである。

2. Sahajavajra の瑜伽行中観派批判

では、*Sahajavajra* の瑜伽行中観派批判の内容の考察から始めていきたい。この *Sahajavajra* の瑜伽行中観派批判とは次のようなものである。

・ *TDṬ* : D165v7- 166r5, P181v1-8.

「[以上の有形象中観や無形象中観は], 有形象 [論] もしくは無形象 [論] であるから, 真如を知ろうとする者にとっては重視されるべきではない。何故なら, 中観派によっては有形象であることも, あるいは無形象 [の知] が生じることも [重視されるべきでは] ない。[有形象論や無形象論は] 識にもとづいているからである。

それら [二つの中観] は, 了義の教示である般若波羅蜜多 [経] についての智をわずかでも説示したものではない。何故なら, [二つの中観は] 色などが無である識が空性であると言う。しかし [般若経においては], 識は識の自性として空であるように, [識以外の] 色などもそのように述べられている。唯心と説示されている場合, 色があらゆるものより粗大であり, 色に執着することを離れるために, それ (唯心) は [説示されているので] 未了義である。

2 次のように [*Madhyamakāvaiāra* や *Laṅkāvatāra* において述べられている.]

『<外界で見られるものは存在せず, 様々な心が見られるのである>と説かれている経典も色に極めて執着している者たち, その色を排除するために未了義 [と説かれたのである].』

yatrāpy uktaṃ nāsti dṛśyaṃ bahir vai cittaṃ citraṃ dṛśyate ceti sūtre /
rūpe 'tyantaṃ ye prasaktā badhāna³ rūpaṃ tebhyas tac ca neyārtham ehi³ //

² 筆者にとって以下の引用のチベット語訳が読解困難であったため, 提示したサンスクリットテキストに基づいて翻訳した。特に *Madhyamakāvaiāra* の引用については, サンスクリットテキストとかなり異なると推定されることや v.95 が 3 パーダしかないことなどからすれば, 正確な引用でなかったの可能性も考えられる。

³ Li [2014] のママであるが, 読みに課題を残す箇所である。とりえず *badhāna* と *ehi* は, それぞれチベット語訳の *blzogs pa* と *nyid* に相当する語として翻訳した。

[*Madhyamakāvātāra* Chap.6 v.94]

『このことは教師によって未了義であると言われている。さらに、このことは道理として未了義であることがふさわしい。そのようなたぐいの他の経典も未了義であることは、以下の経証が明らかにする。』

neyārthatvaṃ cādideśasya śāstā yuktā yuktyā cāpi neyārthatāsyā /
sūtrasyānyasyāpi caivaṃvidhasya neyārthatvaṃ dyotayaty āgamo 'yam //

[*Madhyamakāvātāra* Chap.6 v.95]

『例えば、病人それぞれに対して [それぞれに相応しい] 医療行為が行なわれるように、諸仏も衆生たちに対して唯心を語った。』

[*Laṅkāvatāra* Chap.2 v.123(=Chap.10 v.406)]

ātūre āture yadvad bhiṣagdravyaṃ prayacchati /
buddhā hi tadvat sattvānāṃ cittamātraṃ vadanti te //

それ故に、[仏陀の教説は] [五] 蘊や [十八] 界や [十二] 処や [三] 界と異なっており、様々なのである。」

de'i phyir rnam pa dang bcas dang rnam pa dman pa'i phyir/ de bzhin nyid ni shes 'dod pas// bla mar bya ba ma yin no// gang gi phyir dBu ma pa yang rnam pa dang bcas nyid dam/ rnam pa med pa nyid 'byung ba nyid ni ma yin te/ rnam par shes pa la brten pa'i phyir ro// 'di dag ni nges pa'i don ston pa'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa la sogs par shes pa cung zad kyang bstan pa yod pa ma yin no// gang gi phyir gzugs la sogs pa med pa'i rnam par shes pa stong pa nyid du gsungs so/ 'ong kyang ji ltar rnam par shes pa ni rnam par shes pa'i rang bzhin gyis stong ngo / de bzhin du gzugs la sogs pa yang gsugs so/ gang la sems tsam du bstan pa 'di la yang gzugs ni thams cad las rags pa (D : rag las pa) yin pas/ gzugs su zhen pa bzlog pa'i phyir de ni drang ba'i don nyid do// de bzhin du

mdo las// rnam pa (P reads las rnam instead of rnam pa.) sna tshogs sems kyiis mthong ba dang // gang las phyi rol dngos po mthong ba med// gzugs su shin tu zhen gang bzlog pa'i phyir// de yang drang ba'i don phyir 'di nyid do//

ston pa yis ni drang ba'i don yang bstan// mdo dang gzhan nas kyang ni rnam par phyed// drang ba'i don bstan phyir na lung 'di dag/

ji ltar nad kyiis na ba la// sman gyi rdzas ni rab sbyin ltar//

de bzhin sangs rgyas sems can la// sems tsaṃ du ni bstaṃ pa yin// zhes pa'o//

de'i phyir phung po dang khamṣ dang skye mched dang / khamṣ rnamṣ dbye baṣ
tha dad pa yin no//.

ここでの「色などが無である識が空性であると言う」ということ、これは、唯心によって外界を否定し、さらに無自性によって唯心を否定して空性に至るという瑜伽行中観派の修習のことであると考えられる。そして、これに対する「[般若経においては] 識は識の自性として空であるように、[識以外の] 色などもそのように述べられている」という批判は、外界も心と同じく無自性によって否定すべきということであると考えられるのである。つまり、Sahajavajra の瑜伽行中観派批判とは、唯心によって外界を否定するという修習の過程に対する批判なのである。

さて、Sahajavajra の瑜伽行中観派批判の内容とはこのようなものなのであるが、興味深いことに、Sahajavajra は Śāntarakṣita などが無自性を証明するために頻繁に用いる離一多性を自身の中観思想に積極的に採用している。このことは Sahajavajra の仏教綱要書の著作である *Sthitisamāsa* (以下 *SThS*) の「中の立場」(*Madhyamāsthiti*)、つまり中観思想について述べた章から理解することができる。

・ *SThS* : MS 7r3L-4, D94v4, P101v7.

「成り立っている [三] 界、これらは刹那滅であることからすれば、縁により生じたものであり、一 [性] と多性を離れていることからすれば、無自性なるものである。」

ya eva dhātavaḥ siddhāḥ kṣaṇikatvāt praṭītyajāḥ /
niḥsvabhāvās ta evāmi ekānekatvahānitāḥ //

しかし、離一多性は無自性という中観派に共通する主張を証明するために用いられるのであり、先の瑜伽行中観派批判の内容と矛盾することもないので、Sahajavajra がそれを採用していたとしても不自然ではない。また、Sahajavajra とほぼ同時代の Atiśa (982-1054) も瑜伽行中観派以外の中観派の論師を支持するにもかかわらず、離一多性を採用している。⁴このことからするならば、Sahajavajra が積極的に離一多性を採用したというより、中観思想を語る際に離一多性に言及することが当時のインド仏教の常識となっていたと理解するほうがむしろ正確かもしれない。

ところで、Sahajavajra の瑜伽行中観派批判においては、その根拠として Candrakīrti の主著である *Madhyamakāvātāra* (以下 *MA*) が引用されている。それ故、この引用される *MA* によって、Sahajavajra が重視している Candrakīrti の説の

⁴ Atiśa の中観思想については宮崎 [2012] を参照。

一端が明らかになる。ここで明らかとなる Sahajavajra が重視している Candrakīrti の説とは、唯心が経典に説かれているとしても、それをあくまで外界に対する執着を抑制するための、空性に至る修習とは何ら関係ない対処療法的な教説とするという説である。Candrakīrti の徹底した瑜伽行派批判において提唱されたこの唯心未了義説を Sahajavajra が重視していることは次の TDT から明らかである。

・ TDT : D164v3-4, P180r3-4.

「あるいは、「有形象と無形象はない」というのは、瑜伽行派 (*Yogācāra) たちによる主張が承認されるべきでないこと、そのことが理解される。彼らは所取と能取 [の相互依存関係に] よる事物 (*vastu) が空の本質であり、真如であると理解し、[何かしらの] 自性を空性であると認めている。[しかし、] 無自性の特徴はそのようではないから、未了義として唯心 (*cittamātra) は説示されるのである。」

yang na/ rnam bcas ma yin rnam med min// zhes bya ba ni rNal 'byor spyod pa dag gyis (P reads rNal 'byor spyod pa pa gang dag gyi.) 'dod pa nyid (D : i) blang bar bya ba ma yin pa de nye bar len pa'o// de dag gis (P gi) gzung ba dang 'dzin pa'i dngos po (D : pos) stong pa'i bdag nyid de bzhin du khas blang ba'i phyir (P adds gang gi phyir) rang bzhin stong pa nyid du khas blangs pas rang bzhin med pa'i mtshan nyid de bzhin nyid med pa'i phyir drnag ba'i don du sems tsam du bstan pa yin no//

3. Sahajavajra の世俗説-世俗縁起説-

さらにここで、唯心未了義説以外の Sahajavajra が重視している Candrakīrti の説を明らかにするために、Śāntarakṣita の *Madhyamakālaṃkāravṛtti* (以下 MAV) において行なわれている議論を取り上げてみたい。

・ MAV : Cf. 一郷 [1985] II p.290 l.14-p.292 l.5

「因果によるあり方を主張命題 (*pratijñā) として、あらゆる悪しき論を避けようとする者にとっての世俗のものごと、それらが何であるか考察されるべきである。[世俗のものごととは] 心と心所のみを本質とするのか、あるいは外界を本質としているのか。ここで、ある者は後者の立場にもとづいて-

『論書において<唯心である>とされていることは、行為者と享受者の否定である。』

[*Madhyamakahr̥daya* Chap.5 v.28cd]

-とこのように主張する者のたぐいがある。他の者たちは [次のように] 考え

る。

『因と果として成ったものも何らかの知識である。自身として成立しているもの、それは知識としてあるものである。』

[*Madhyamakālaṃkāra* v.91]

この議論からは、世俗を外界とする説を主張する **Bhāviveka** とは異なり、**Śāntarakṣita** が世俗を心と心所のみとする説、つまり世俗を唯心とする説を主張していることが理解される。

さて実は、先に考察した **Sahajavajra** の瑜伽行中観派批判は、この **Śāntarakṣita** のような世俗を唯心とする説に対する批判、つまり世俗唯心説批判としても機能すると考えられる。何故なら、外界を否定して唯心に至るという過程が否定されるならば、世俗を唯心とすることは不可能であり、世俗唯心説が成立しなくなるからである。では、**Sahajavajra** 自身の世俗説はどのようなものであろうか。

Sahajavajra は自身の著作において世俗を明確に定義していないが、それを示唆する部分はある。まずそれは次のような *SThS* の「中の立場」における二つの偈である。

- *SThS* : MS 7v5L, D94v7-95r1, P102r3-4.

「世俗としての生起、それには真には不生起がある。その不生起のゆえに、心も自性として無自性である。」

saṃvṛtyā yasya cotpattis tasyānutpattis arthataḥ /
anutpādād ataś cittam niḥsvabhāvaṃ svabhāvataḥ //

- *SThS* : MS 10r4L, D96r1, P103r5-6.

「何故なら、世俗を離れたいかなる真実も存在しない。世俗としての生起、それは真には不生起である。」

saṃvṛtivyatirekeṇa yasmāt tattvaṃ na kiṃcana /
utpattir yaiva saṃvṛtyā evānutpattir arthataḥ //

これらの偈においては、勝義である不生起に相対的なものとして「世俗としての生起」が説かれている。そして、次ような *TDṬ* の記述において、勝義である不生起に相対的なものとして縁起が説かれていることからすれば、「世俗としての生起」とは、縁起のことであると考えられる。

- *TDṬ* : D166v6-167r1, P182v2-3.

「ここで最高のグルの教誡 (*upadeśa) という飾りにより飾られた双運の真如で

ある仏母〔般若波羅蜜多經〕の密意であり、賢者たちの心を魅了するものが説示される。何故なら、一切法は不生起たる真実（**tattva*）であり、このようにそれは縁起を本質とするからである。虚空華のように絶対無という性質ではないのである」

'dir bcom ldan 'das ma bla ma dam pa'i man ngag gi rgyan (P : gis brgyan) gvis brgyan pa'i zung du 'jug pa'i de bzhin nyid kyi dgongs pa ni mkhas pa rnams kyi yid 'phrog par (P : pa) byed pa nye bar bstan te/ gang gi phyir yang chos thams cad ni ma skyes pa'i de kho na nyid do// de ltar na yang de ni rten cing 'brel bar 'byung ba'i bdag nyid yin pa'i phyir ro// nam mkha'i me tog bzhin shin tu med pa'i chos ni ma yin no//

このように、「世俗としての生起」がすなわち縁起であるとするならば、Sahajavajraの世俗説とは、世俗を縁起とし、世俗のものごとを縁起したもの（*pratītyasamutpanna* / 縁已生）とする世俗縁起説ということができるだろう。

さらに、このような世俗縁起説は、Sahajavajraが最も勝れた中観派とする Candrakīrti がはじめて提唱した説である。少し長くなるが、このことを指摘した箇所を岸根〔2002〕から引用してみよう。

・岸根〔2002〕p.80

前掲（引用者注：『入中論』）第七一頌では、世俗を「自性を隠蔽する虚偽の認識」と定義するだけでなく、それが「作られた事物」(*padārthaṃ kṛtakam*) であるとも述べている。

さらに、それに対する注釈では「縁起したもの」(**pratītyasamutpanna*) と言い換えられている。『入中論』のこれらの言明がはたして世俗の定義として提示されたものかどうかは明瞭ではないが、『プラサンナパダー』では世俗の第二番目の定義として「相互に生じたもの」(*paraspara-sambhavana*) が挙げられ、さらにそれは、「相互に依存したもの」(*anyonya-samāśraya*) という説明を加えられて、世俗の定義として明確に提示されている。したがって、『入中論』の記述はともかく、チャンドラキールティが、世俗の定義そのものに縁起という観念を組み込もうとしていることは確実である。この定義は、バーヴィヴェーカはもとより、チャンドラキールティ以前の中観思想ではまったく見出されず、筆者の知る限り、中観学派以外でも確認されないようである。

このように Sahajavajra の世俗説は、Candrakīrti から継承した世俗縁起説なのである。そして、次の *TDṬ* の記述のように、Candrakīrti が説いたことが「縁起を特徴とするもの」(**pratītyasamutpādalakṣaṇa*) とされていることからするならば、この世俗縁起説こそが、Sahajavajra が最も重視している Candrakīrti の説であると考

えられるのである。

・ *TDT*: D166b3-4, P182a6-7.

「このように中観は, āryaNāgārjuna, Āryadeva, Candrakīrti などによって説かれた縁起を特徴とし, [それが] 真如を知ろうとする者にとっての対象となるだろう。」

de ltar (P adds des.) na dBU ma (D adds pa.) 'phags pa Klu grub dang / 'Phag pa lha dang / Zla ba grags pa la sogs pas bzhed pa rten cing 'brel bar 'byung ba'i mtshan nyid de/ de bzhin nyid ni shes (D omits shes.) 'dod pas (P : pa'i.) don yin par 'gyur ro//

4. Sahajavajra の中観思想-双運中観-

最後に, Sahajavajra の中観説について考察してみたい。すでに松本 [2015] で指摘したとおり, Sahajavajra は自身の中観思想を「双運中観」(*Yuganaddha-madhyamaka or -madhyamā, Zung du 'jug pa'i dbu ma) と呼称する。そして, この「双運中観」の究極的な目的とは, 智慧と方便, 涅槃と輪廻などといった相互対立が解消されることである。

では, この相互対立はどのようにして解消されると Sahajavajra はいうのであろうか。世俗の定義と同じく, Sahajavajra は自身の著作において, このことを明確に述べてはいない。しかし, Sahajavajra が Candrakīrti の世俗縁起説を重視していることを考慮するならば, それはかなり容易に推測することができる。つまり, およそあらゆる相互対立を勝義と世俗の相互対立として集約し, さらに世俗すなわち縁起, 縁起すなわち勝義であると考察するのである。⁵このようであるならば, あらゆる相互対立は縁起を媒体として解消され, あらゆるものは平等性 (samatā) を獲得するのである。

また, この世俗縁起説が双運中観を実現させる一要素であることは, 次のような *SThS* の「中の立場」において, 双運の述語として「縁起を特徴とするもの」が用いられていることから明らかである。

・ *SThS* : MS 10r5L-v1R, D96r1-2, P103r6-7.

「かの双運は真実であり, 縁起を特徴とするものである。そして, 真如であり, 法界であり, 最高の般若波羅蜜である。」

「存在の究極であり, 不生であり, 無所得であり, あるいは涅槃である。さらに空

⁵ 縁起すなわち勝義 (空性) とする説の提唱者はいうまでもなく Nāgārjuna である。(Cf. *Mūlamadhyamakakārikā* Chap.24 v.18)

性であり、無相であり、無願であり、無為である。」

yuganaddham idaṃ tattva praṭītyotpādalakṣaṇam /
tathatā dharmadhātuś ca prajñāpāramitā parā //

bhūtakotiṛ anutpādo 'nupalambho 'tha nirvṛtiḥ /
śūnyatā cānimittaś cāprañidhānam asaṃskṛtam //

このように、自身の中観思想である双運中観を実現させる一要素であるからこそ、Sahajavajra は Candrakīrti の説の中でも世俗縁起説を最も重視しているのだと考えられるのである。

5. Sahajavajra の思想に関する課題-結論にかえて-

以上、松本 [2015] での不備を補いつつ、Sahajavajra の中観思想をある程度明らかにすることができたと考えられる。ここでは、本稿でも考察が及ばずに残された、Sahajavajra の思想に関する課題を二つ挙げて結論にかえたい。

まず、課題の一つ目として挙げるのは、師である Advayavajra と弟子である Sahajavajra、両者の中観思想の関係の解明である。仏教綱要書の著作である *Tattvaratnāvalī* において、Advayavajra は中観派を喩幻不二派 (Mayopamāvādin) と一切法無住派 (Sarvadharmāpratiṣṭhānavādin) という二派に分類し、後者をより勝れているとする。しかし、特定の中観派の論師の名前に言及することはない。一方、Sahajavajra は Candrakīrti を最も勝れた中観派とするが、師である Advayavajra が用いる中観派の分類にまったく言及していない。このような両者の中観思想が同一であるのか否かということが、今後検討されなければならない。

そして、課題の二つ目は、Sahajavajra の密教思想の解明である。すでに松本 [2015] で指摘したことであるが、Sahajavajra は真言理趣 (mantranaya) に一致する波羅蜜理趣 (pāramitānaya)、つまり密教に一致する顕教を主張している。このようならば、Sahajavajra の āryaNāgārjuna→Āryadeva→Candrakīrti という中観派の系譜は、*Guhyasamāja* の解釈流派である聖者流の系譜でもある可能性が考えられるのである。しかし、このことを確認するためには、Sahajavajra の密教思想において、聖者流の説が採用されているか否かを検討しなければならないだろう。

(総合仏教研究所研究員)

[参考文献]

[一次文献]

- ・ *Ālokaṃālā* of Kambala. See Lindtner[2002].
- ・ *Tattvadaśaka* (TD) of Advayavajra. See 密教聖典研究会[1991].
- ・ *Tattvadaśakaṭīkā* (TDṬ) of Sahajavajra. Toh2254, Ota3099.
- ・ *Tattvaratnāvalī* (TRĀ) of Advayavajra. See 宇井[1963] and Mimaki[1986].

- *Bodhicittavivaraṇa* of Nāgārjuna. See Lindtner[1982].
- *Madhyamakāvātāra* (MA) and its *bhāṣya* of Candrakīrti. Toh3862, Ota5263 and see LVP[1907-12], Li[2014].
- *Madhyamakakārikā* of Nāgārjuna. See Ye[2011].
- *Madhyamakālamkāra* and its *vṛtti* of Śāntarakṣita. See 一郷[1985]Part II.
- *Laṅkāvatāra*. See Vaidya[1963].
- *Sthitisamāsa* (SthS) of Sahajavajra. *SanskritMnuscript* = The Nepal-German Manuscript Preservation Project (NGMPP) B 2A/4. Tibetantranslation = Toh2227, Ota3071, And see 岩田[1998], [2000],[2010],[2013]b, [2014].

[二次文献]

- Brunnhölzl, Karl
2014 : Straight from the Heart, Snow Lion.
- Hatano Hakuyu (羽田野 伯猷)
1958 : "A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tāntric Buddhism in India", 『チベット・インド学集成』第三卷, インド編 I, 法蔵館, pp.166-181 所収.
- Isaacson Harunaga and Sferra Francesco (ed.)
2014 : The *Sekanirdeśa* of Maitreyanātha (Advayavajra) with the *Sekanirdeśapañjikā* of Rāmapāla, MANUSCRIPTA BUDDHICA 2, Napoli.
- 一郷 正道 (Ichigo Masamichi)
1985 : 『中観莊嚴論の研究』 I(研究)&II(テキスト), 文栄堂.
- 岩田 孝
1998 : 『定説集成』(Sthitisamuccaya) 和訳研究-無形相知識瑜伽行派の定説(1)-, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』41-1, pp.3-14.
- 2000 : 『定説集成』(Sthitisamuccaya) 和訳研究-無形相知識瑜伽行派の定説(2)-, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45-1, pp.13-26.
- 2010 : 『定説集成』(Sthitisamāsa) 和訳研究-無形相知識瑜伽行派の定説(3)-, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56, pp.5-17.
- 2013a : 『真実十偈釈』(tattvadaśakaṭīkā) 和訳研究(ad Tattvadaśaka5d-6), 『伊藤瑞叡博士古希記念論文集』pp.767-781.
- 2013b : 『定説集成』(Sthitisamāsa) 和訳研究-無形相知識瑜伽行派の定説(4)-, 『東洋の思想と宗教』30, pp.1-33.
- 2014 : 『定説集成』(Sthitisamāsa) 和訳研究-無形相知識瑜伽行派の定説(5)-, 『東洋の思想と宗教』31, pp.22-51.
- 磯田 照文
1978 : 「pāramitā-yāna と mantra-yāna」, 『東北大学文学部研究年報』29, pp.105(142) -135(112).
- 岸根 敏幸
2001 : 『チャンドラキールティの中観思想』, 大東出版.
- la Vallée Poussin(=LVP), Louis de
1907-12 : *Madhyamakāvātāra* par Candrakīrti [Bibliotheca Buddhica 9], de l'Académie impériale des sciences (repr. Motilal Banalasisdass 1992).
- Lindtner, Christian

- 2002 : A Garland of Light *Kambala's Ālokaṃālā*, Asian Humanities Press.
・ Li Xuezhong (李 学竹)
- 2014 : "Madhyamakāvatāra-kārikā Chapter 6", *Journal of Indian Philosophy*, This article is published with open access at Springerlink.com
・ 松田 和信
- 1995 : 「サハジャヴァジュラの仏教綱要書 (Sthitisamuccaya)」, *印度学仏教学研究* 42-2, pp.205-210.
・ 松本 恒爾
- 2015 : 「Sahajavajra の Candrakīrti 観について」, 『密教学研究』 47, pp.49-66.
・ 松本 史郎
- 1980 : 「Ratnākaraśānti の中観説批判 (下)」, 『東洋学術研究』 19-2, pp.152-180.
・ Mimaki Katsumi (御牧 克己)
- 1986 : "The Tattvaratnāvalī of Advayavajra (Tibetan Text)", 『経量部 (Sautrāntika) 研究』 所収.
・ 密教聖典研究会
- 1991 : 「アドヴァヤヴァジュラ著作集-梵文テキスト・和訳(4)-」, 『大正大学総合佛教研究所年報』 13, pp.291(46)-242(95).
・ 宮崎 泉
- 2012 : 「アティシヤの中観思想」, 『空と中観』 シリーズ大乘仏教 6 pp.137-168 所収.
・ S.Ruegg, David
- 1981 : *The Literature of Madhyamaka school of Philosophy in India [A History of Indian Literature Vol. VII Fasc.1]*, Harrassowitz.
・ 宇井 伯壽
- 1963 : 「ADVAYAVAJRA TATTVARATNĀVALĪ」, 『大乘仏典の研究』 pp.1-52 所収.
・ Vaidya, P. L.
- 1963 : *SADDHARMALANKĀVATĀRASTŪRAM [Buddhist Sanskrit Text No.3]*, The Mithila Institute.
・ Vose, Kevin A.
- 2009 : *Resurrecting Candrakīrti*, Wisdom Publications.
・ 矢板 秀臣
- 1995 : 「Sahajavajra の Dharmakīrti 観」, 『密教学研究』 27, pp.31-45.
・ Ye Shaoyong (叶 少勇)
- 2011 : 『〈中论颂〉 梵藏汉合校・导读・译注』, 中西書局.

